

令和元年度 学校評価【計画書・報告書】

加賀市立 学校 校長 山津 正敏 印

学校教育ビジョン		・授業や学校行事、部活動等を通して、教師と生徒、生徒同士の良好な人間関係を築く ・それらを通して、思考力、判断力、表現力を育て、主体的、協動的に行動できる生徒を育成する		・それを土台に、わかる授業、楽しい授業を工夫し、参加度の高い授業を行う		判定結果 (中間)	判定結果 (最終)	今後の改善策		
評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組み状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考			
① 教育課程・学習指導	学習サイクルを確立し学習意欲を高める。	各教科担当が宿題の点検を丁寧に行う。1時間程度かかる学年にあった課題学習（予習・復習）を継続して用意する。家庭学習の習慣化を目指し、学校便り、学年だより、懇談会などの場を通して、家庭における過ごし方（時間の使い方）を含め、保護者の協力を求める。	教務主任 各教科	学習習慣が身につけている生徒と身につけていない生徒の二極化傾向にある。全体でも家庭学習の時間が少ない。	(成果指標) 家庭での学習が習慣化した生徒が増えた。	家庭での学習時間が1時間以上の生徒が、1・2学期平均で A 70%以上になった B 60%以上になった C 50%以上になった D 50%未満であった	学習・生活アンケート(15)の1・2学期平均がDの場合は、課題の内容を再検討する。生徒調査(1・2学期末)	76.5	72.7	この目標を掲げて3年目で初めて最終評価がA(72.2%)となった。3年生が夏休み以降頑張った成果と分析する。しかし、中間結果より最終結果が下回った点を見ると、3年生の頑張りよりも12年生の学習時間の減少が勝っていると判る。来年度は達成基準を10%高く設定し、12年生の学習時間の減少を押さえる意欲付けの工夫をする必要がある。
		生徒の実態を把握し、学び合い学習に加え振り返り活動を大切に学習形態に変えるなどの指導を工夫し、各教科の努力目標、指導の重点を確認し、それに向けて努力する。また、授業のユニバーサルデザイン化及び授業規律の徹底と定着を継続する。	教務主任 研究主任	生徒の実態に応じた指導法を工夫し、片中スタンダードを徹底してきているが、振り返り学習を意識して取り組む必要がある。	(成果指標) 授業が分かりやすく、学習意欲が向上した。	(17)「授業の内容が分かりやすい」と答えた生徒が、1・2学期平均で A: 80%以上になった B: 70%以上になった C: 60%以上になった D: 60%未満であった	学習・生活アンケート(17)の1・2学期平均がDの場合は、指導法の内容を再検討する。保護者アンケート⑨も参考に。生徒調査・保護者調査(1・2学期末)	A 87.5	A 87.7	中間・最終ともにA判定となった。目標達成となったので、達成度判定基準を保護者アンケートの⑨「お子さんは授業がわかりやすいと言っている。」に変更する。理由は、生徒アンケートと比べると保護者アンケートは15%ほど低い。生徒の家庭での発言は自己弁護の意識(成績が上がらないのは授業がわかりにくいから)も加味されるかもそれないが、本音に近いのではないかという予測の元判断基準を変えることとする。
② 生徒指導	情報の共有から行動実践へつながる生徒指導体制を確立する。	「生徒指導委員会・各学年会」や「いじめ問題対策チーム」から情報の共有から行動実践をスムーズかつ有効にするための連携を確認する。また指導体制を確立するために事例検討会等や校内研修を行い、日々の実践につなげる。	生徒指導主事 学年	情報の共有から行動実践へスムーズにつながるようになってきている。	(成果指標) 情報の共有がなされていたか。 情報の共有から行動実践につながったか。	22「様々な問題行動の防止のための早期指導に学校全体で取り組んでいる」の項目の1・2学期のa bの合計平均が A: 90%以上の場合 B: 80%以上の場合 C: 70%以上の場合 D: 70%未満	教職員アンケート22の1・2学期のa bの合計平均が80%未満のとき、方法・内容について再検討する。教職員調査(1・2学期末)	A (96.0)	A (96.0)	最終判定はAとなっているので、一定の成果はあったと言える。時代の変化とともに指導の在り方も大きく変化している。生徒の立場に立ち、きめ細かな指導・家庭連絡など、日々の実践を振り返ることが大切だと感じた。また、家庭と緊密な連携ができてきているという項目のアンケート結果が昨年度から低下している。早期指導を取り組むためには家庭と密な連絡が必要不可欠である。各学年、各担任に全てをお任せするようにならないように生徒指導体制として、危機管理の意識向上、家庭への密な連絡体制を丁寧にするを常に意識しなければならない。
③ 進路指導・生き方指導	系統的な指導と、自分の将来を考えた進路選択する能力・態度を育成する。	進路だよりを計画的に発行したり進路ノートを活用したりして、様々な情報を適切に伝える。また、道徳、特活、総合的な学習の時間、キャリア教育などの全体計画、指導計画を確認する。将来の生き方を視野に、3年間を通した指導を推進する。	進路指導主事	1年生での「地域の夢からお話を聞く会」と職業調べ、2年生での職場体験活動、3年生の進路指導が中心となっている。	(成果指標) 職場体験や体験入学を通して自分の将来について考える生徒が増えた。	(3)「将来の夢や目標を持っている」の項目の1・2学期のa bの合計平均が A: 85%以上の場合 B: 70%以上の場合 C: 60%以上の場合 D: 60%未満	学習・生活アンケート(3)の1・2学期のa bの合計平均が70%未満のとき、指導体系・方法を検討する。生徒調査(1・2学期末)	B (76.6)	B (74.8)	B判定だが最終評価は中間評価よりやや下回っている。1、2年生では学習に関する項目でも同じような傾向が見られるので、学習内容が難しくなり自分の夢を諦めているのではないかと思われる。総合的な学習の時間で得た知識や行事で育んだ自己肯定感などを自分の未来に活かせるように、活動の後の取り組みを丁寧に行い、夢や目標に向かって努力する姿勢を育てていきたい。
④ 保健管理	基本的な生活習慣の定着させる。特に歯や口の健康づくりや睡眠時間の改善を図る。	生徒保健委員会の活動で正しい生活習慣に関する知識を広めたり、母親委員会との協力や家庭との連携を考えていく。また、学校保健委員会等で家庭・地域と情報を共有し、基本的な生活習慣の定着につなげる。	保健主事	むし歯の治療率は年々高まってきているが、春の検診で再びむし歯になっている生徒が多い。またTV・ゲーム・ネットなどで睡眠時間が少なく体の不調を訴える生徒がいる。	(成果指標) むし歯の治療率が向上したか。	歯科検診でむし歯があった生徒の治療率が A: 90%以上の場合 B: 80%以上の場合 C: 70%以上の場合 D: 70%未満の場合	治療率が80%未満のときは取り組み方を検討する。むし歯治療済みカードの回収率	C (74.6)	B (88.1)	むし歯の治療率は現在治療中の者も含めて88.1%である。昨年度に引き続き、生徒保健委員が自分の学級で朝礼の時間等を使い働きかけを行なうということを中心に取り組み、日々の実践を振り返ることができた。昨年度に引き続き、むし歯治療済みカードの回収率が高くなっており(昨年度83.1%)表彰も高まってきていると思われる。未治療生徒については担任と連携し、個別指導や保護者に働きかけを行っていく必要がある。
⑤ 安全管理	防災機器等の扱い方を全職員が共有し、実際に扱い、復旧できるようにするための講習会を開催する。	1学期中にの保健体育科の授業と連携して、教職員の希望者に消防署員を招聘したAEDを用いた心肺蘇生法の講習会を実施する。また、防災訓練を適切に実施し、防災意識の高揚を図る。加えて教職員向けの危機管理の校内研修会を開催し安全管理意識の向上に努める。	教頭	校内研修会等を通じて、危機管理マニュアル・防災マニュアル等の周知徹底を図っている。また、避難訓練においても、より効果的な訓練の方策(アクションカードの導入等)を検討していく。	(成果指標) 安全講習会や防災機器の研修会を受け、災害行動マニュアルを理解し、防災機器・救命器具に対する理解が深まった。	26「職員が災害行動マニュアルを理解し、防災機器(防災盤)等の操作ができる」の項目のa bの合計が A: 85%以上の場合 B: 70%以上の場合 C: 60%以上の場合 D: 60%未満	教職員アンケート26のa bの合計が70%未満のとき、方法・内容について再検討する。教職員調査(2学期末)	B (76.0)	B (81.0)	夏休みに消防士を招き、熱中症になったときの手当やAEDの扱い方、心肺蘇生法等について校内研修会を行った。熱中症に見立てた患者への声かけなど実演してみることで、緊急時における対応を学ぶことができた。今後は養護教諭とも連携し、アクションカードに従った処置・対応の講習会を検討していきたい。また災害における避難誘導の仕方等の研修会も検討していきたい。
⑥ 特別支援教育	校内委員会を月に一回程度開催し、情報交換や生徒理解に努め、個々に応じた効果的な支援について検討する。	校内委員会や研修会を通して、全教職員で共通理解を図る。学年会や生徒指導委員会、特別支援教育支援員、SC、専門相談員等と連携してより具体的に個々の支援の方法、内容、実効性について検証し、実践していく。	特別支援コーディネーター	事例検討会や校内研修会を開催し、支援の方法を検討している。	(成果指標) 生徒は学校が楽しいと感じているか。	(18)「学校に行くのは楽しいと思う」の項目を、3・2・1・0点でポイント化したとき、1・2学期の平均が A: 10%以上向上の場合 B: 5%以上向上の場合 C: 5%未満向上の場合 D: 減少の場合	C、Dのとき、原因を分析し、次年度の取組を検討する。	C (1.0%)	C	昨年度の3学年平均183Pから2.8P向上し、185.8Pとなったが、目標の数値には届かなかった。昨年度の達成率は88%（「学校が楽しい」でAおよびBと回答）で今年度は85%で、特に1年生の達成率が1学期の84%から2学期は79%に下がっている事が問題となっている。この傾向が結果に反映しにくいポイント化した集計方法から達成率への変更して、登校すること自体に疑問を感じている生徒達が楽しさを感じるために、これまで以上にクラス・学年・学校全体で生徒同士のつながりやあたたかさを感じることができる取り組みを充実させていこうと考える。
⑦ 組織運営業務改善	全職員が学校運営参画意識を高め、各分掌に適宜副担当事務を設け協働によって仕事にあたり、分掌の標準化と多忙化、負担感の軽減に努める。働き方改革にも業務改善をさらに進める。	各分掌の主任や責任者を中心に学年会や各種委員会を定期的かつ効果的に開催し、連絡調整、報連相を密にする。その際、他の分掌とも適切に情報交流し、縦と横の連携を適切に行い、職員一人一人の学校運営参画意識を向上させる。勤務時間と部活動時間の管理を適切に行うとともに、諸会合の効率化やICT化による時間短縮を進め、超勤削減とワークライフバランスの実現を図る。	教頭 各主任	各自の校務分掌に対する自覚と責任の意識は十分高まってきており、円滑な組織運営を目指しているが、能力・適性に応じた分掌の標準化に至っていない。	(成果指標) 前年度に比べて、残業時間が減っているか	職員の残業時間の平均が前年度の学期に比べて A: 20%以上削減の場合 B: 10%以上削減の場合 C: 10%未満削減の場合 D: 増加の場合	C、Dのとき、原因を分析し、次年度の校務分掌や業務内容を検討する。	A (20.3)	B (9.8)	昨年度に比べ今年度の時間外勤務時間は、全体的に減少している。1日あたりの時間外勤務時間は、1学期は前年度の79.7%で258.5分から206.1分になっている。2学期は前年度比の90.2%で、224.7分から202.6分となっている。ただ今年度の2学期の校務分掌にかける時間だけが増加傾向にある。2学期の行事や総合の時間等で職員が工夫された取組で生徒の満足度も高かったが、今後は生徒と職員の負担が大きくなりすぎない内容の検討をしなければならぬ。
⑧ 研修	思考力・判断力・表現力を育て、学力の向上を目指す。	思考力・判断力・表現力の育成と学力の向上を図るために、各教科・領域・学年で工夫している内容を提案授業、研究授業、互見授業から学び合い、授業改善につなげる。若プロにも授業改善を目的とした研修を積極的に進めていく。	研究主任	教科の枠を越えた授業研究、互見授業を実施している。	(成果指標) 授業が分かるという生徒が増えたか。	授業アンケート⑦「私は、この教科の学習内容を理解できた。」と答えた生徒が A: 90%以上の場合 B: 80%以上の場合 C: 70%以上の場合 D: 70%未満	C、Dのとき、原因を分析し、次年度の研修内容を検討する。	A 97	A 97.5	年度当初に提案授業を行い、思考力・判断力・表現力を育てる授業づくりについて共通理解を図った。さらに、研究授業や授業を参観し合うことを通じて、どのように生徒に力を付けさせていくか考え、実践することができた。アンケートでは、この教科が理解できたと答えた生徒が高く、「わかる・できる・使える」というサイクルを大切に授業づくりの効果が表れている。しかし、活用力が育ったかについては、学力調査結果から課題が見られるので、今後も教職員が同じベクトルで活用力を育てるように研究を進めていきたい。
⑨ 保護者、地域との連携	学校の情報公開を充実させ、保護者との共通理解を図る。	各種たよりや資料の提供など、学校行事や教育活動等の情報をHP上でも積極的に公開する。そのために各担当者の連携を密にし、更新頻度を増やし内容の充実を図る。また、掲示板に「相談窓口」や「今月の部活動予定」を明示する。加えて、必要に応じて各種書類のダウンロードも可能にしていく。学校の情報を適切に伝えるためにも、メール配信を活用・充実を図っていく。	情報担当 教頭	HPを逐次更新し、加えて内容の充実をさらに図っていく。また、相談窓口も掲示板に明確化する。また、メール配信は、今後も積極的に活用していき。	(成果指標) 担当を中心に、充実したホームページの更新ができていたか。また、メール配信が適宜・適切に行われていたか。	①「学校たよりやホームページ等で、学校の様子がわかる」の項目の1・2学期のa bの合計平均が A: 90%以上の場合 B: 80%以上の場合 C: 70%以上の場合 D: 70%未満	保護者アンケート①の1・2学期のa bの合計平均が70%未満のとき、方法・内容について再検討する。護者アンケート(1・2学期末)	A (90.7)	B (86.7)	学校の様子がわかると答えた保護者の割合は、1学期と比べて2学期の方が低く、中でも1年生が87.7%から80.8%に減少している。小学校ではきちんと保護者に渡せていた便りが、だんだん面倒くさく感じて渡さない生徒が増えていると思われる。また、学校のPCの故障で、2学期はHP等の更新ができなかった時期もあった。今後は各家庭のメール配信登録者を増やし、学校の様子やお知らせ等を継続して配信していきたい。
		定期的な授業参観を実施したり、保護者との懇談の機会を適宜もつたりして、親身な対応を基盤として学校教育や家庭教育に親での共通理解を図っていく。また、校区連携協議会を充実させ、小学校との連携をさらに推進していく。	教頭	保護者との懇談の機会のみならず、時宜を得た連絡を密にして早期にかつ親身な対応を図っていく。また、小中連携をさらに緊密・活性化させていく。	(成果指標) 個人懇談や保護者懇談を適切に実施し、家庭との連携を充実したものにできたか。	③「学校は、家庭への連絡や意思疎通をきめ細かく行っている。」の項目の1・2学期のa bの合計平均が A: 90%以上の場合 B: 80%以上の場合 C: 70%以上の場合 D: 70%未満	保護者アンケート③の1・2学期のa bの合計平均が85%未満のとき、方法・内容について再検討する。(1・2学期末)	A (92.6)	B (85.0)	学期を終るごとに、生徒の学力・部活動・交友関係などによるトラブルや悩みが増加し、保護者への連絡も密に行っている。しかし保護者の捉え方や考え方の違いから対応に不満を感じている保護者の現状がある。早く丁寧な対応を心掛け、親を味方につけられるような関わり方が必要である。
⑩ 教育環境整備	安全点検の日常化を図り、施設設備の改善をする。	掲示担当者を明確にし、適切な掲示計画をもとに各学級・廊下の掲示物の充実を図る。また、「トイレ」等の実用を重点に清掃活動を強化し、校内環境に努める。加えて、毎月の安全点検により改善状況を適切に把握し、市とも協議した上で早急な対応を実施する。職員で修理可能なところは随時修理していく。	教頭 各担当	定期的な安全点検を実施し即時対応に努めているが、校舎の老朽化に伴う故障箇所の修理と予算とのバランスを図る必要がある。	(努力指標) 毎月の安全点検等を確実に28「施設設備の点検・整備・修繕が行われている」の項目のa bの合計が A: 95%以上の場合 B: 90%以上の場合 C: 80%以上の場合 D: 80%未満	教職員アンケート28のa bの合計が90%未満のとき、方法・内容について再検討する。教職員調査 毎月の安全点検調査	A (100)	A (100)	今年度の安全点検は、毎月から学期に2回に減らした。安全点検や日々の観察から交換や修理が必要な箇所を把握し、修理・修繕を行った。校舎の老朽化による雨漏りや、蛍光灯の安定器の交換など市に要望も出している。今後は、基本的な修繕の仕方について研修会を行い、誰もが修理できる体制を作っていく。	
学校関係者評価	・生徒が落ち着いている雰囲気は地域でも感じられる。 ・学習時間が向上したことは良いこと。地域に塾が無いことと学習時間が短いことは関係があるかもしれない。 ・金沢市の学力調査の結果を学校ごとに全て開示することには違和感を強く感じている。	・ICTや情報教育も必要だが活字を読むことを大切にしたい。 ・働き方改革の為には、正規採用を増やすことが絶対必要と考える。加えて業務のアウトソーシングも進めると良いと思う。 ・不登校が心配。								